

鯨組

237
2011.3



平田好輝

足柄の先の……

足柄の先のカヤマという駅から
歩いて三十分のところに
わたしの今度の勤め先がある
バスもタクシーもないところなので
ひたすら歩いて行くしかない

駅から橋のところまで
まっすぐ行き
橋を渡り切ってから
土手の上をまっすぐ行き
土手を降りてから畠の中を
みたび まっすぐ行く
単純な道のりだが
どうしても三十分かかる

広い芝生のある家の
芝生のまんなかに
犬小屋があり
「うめきち」という犬が
小屋の中から顔を出している
そいつが「うめきち」だということは
小屋の屋根に
ちゃんと書いてある
そいつはいかにも「うめきち」という顔で
律義者らしい謹直さで
小屋の中から顔を出して外を見ている

毎朝わたしと顔が合う
顔の表情の中に
わたしの姿を目でとらえたことが表われる

「うめきち」と顔を合わせてから
気を取り直して歩いて行く
畠の中の道で
老人や老婆に会うと
「おはようございます」と言ってくれる
知らない人だが わたしも
「おはようございます」と言って
とぼとぼと歩いて行く



弓田弓子

雨の中薄紅色がふんふんぱぱぱ

白と黒の魚類が
傘の中を通過して行きます
薄紅色のが白と黒を
追っていました
白と黒は
互いの泡で身を隠しているつもりですが
薄紅色にはまるみえです
薄紅色は
くちびるを結んでいるものの
歌をうたっています
ふんふん ふんふん ぱぱぱ
なれた身のこなしです
白と黒が
ふいに傘のうしろから
もどってきました
どちらかをたべてどちらかを
助けていただけませんか
白と黒は四つの目玉を
こちらに向けております
そんなことはできません
どちらもたべることはできませんよ
それより早くいっしょに
お逃げくださいよ
わたくしは湿っぽい身をすぐに
温めなければなりませんから
あなたたちを

消化する力はありませんよ
そこへ薄紅色がやってくる
結んでいた口を
大きくあけて
白も黒もいっしょに
のみこんでしまう
わたくしはあわてて海に向かいましたが
海など見あたりません
帰宅して傘をすぼめると
魚類がこぼれてきました



伊達悦子

献血ルーム

夕べ食べたのは
さばのみそ煮と冬瓜のお汁でした
みそと冬瓜は田舎から宅配便で
祖母も母も似た味付けでしたので
私もたぶん長生きです

わらべ唄を最後まで唄いきれないように
ふるさとの景色が
きちんと思い出せなくなり
日替わりの特売品に慣れると
ほうれん草の季節が
曖昧になります

私の体のすみずみへ
張りめぐらせた赤い網目に
山を下りてきた鹿や
イノシシや
病気を患った鳥がかかることもあり
慌てますが
言葉は
そのことを説明するためではなく
消化液や酵素と同じように
分解して吸収するために
あるのですね

誰かのお役に立つなら
そう思って今日ここに来ました

草野早苗

古書店

その古書店は
地方都市の片隅にある
半地下にあるので
光の量も半分で
通りを過ぎる人々の脚が
淡い光に影を作る

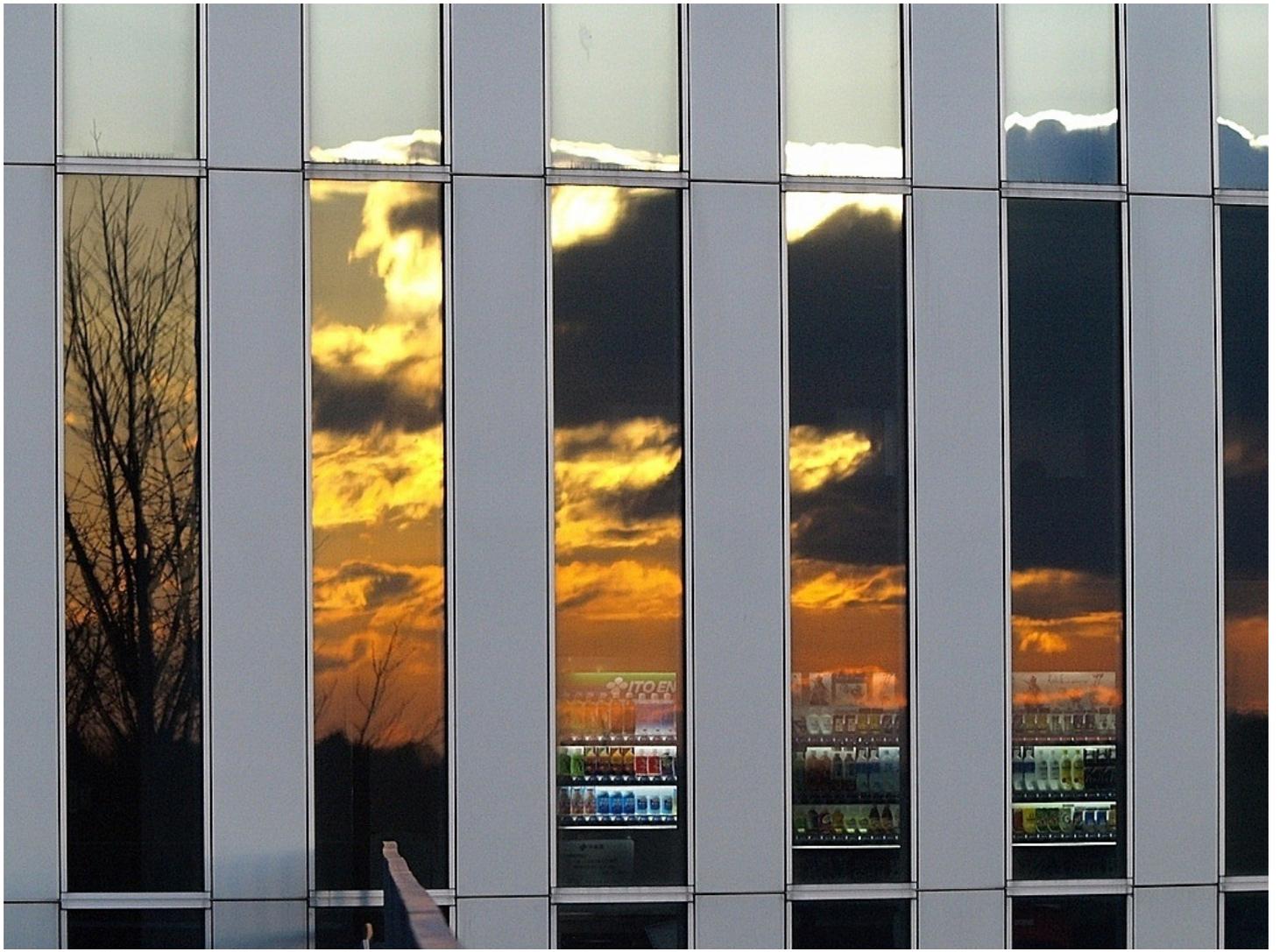
おや
いつもはほとんど人がいないのに
今日は騒がしい
熊のような男が
一篇の詩と生活について話し
羊やロバやオウムや猫が熱心に聴いている
やがて半地下から階段を昇り
去ってゆく蹄の音

熊も時代遅れのトレンチコートを着ると
店主に挨拶して出て行った
店主はいつものように
灯りをひとつだけ残す
紙袋から塩パンを出してかじりながら
夕ゴールの続きを読む

白井恵子

星の砂浜

大気が透けた冬晴れの海へいく
途中、「そらはな」でベーコンレタスサンドとコーヒー
焼きたての葡萄パンを車にのせて
海岸でひとり、食事をとる
潮のスパイスたっぷりに海風もはさんで食べる
サーファーと犬
流木と私
ひろびろとただひろびろと
水の星の砂浜に打ちよせられて
石ころのようにつるんとまるく
お腹のそこもきれいになって
いのちを風にさらす
波打ちぎわにはおびただしい貝殻もうちよせられている
すっかり波に洗われてもろく
ひと足進むたびにこわれてしまう
それは父母がお墓に納まるときの音のようにも聞こえてくる
土地の風習で骨壺など使わない
祖父さんも父さんも母さんもみんな一緒に納まっている
「生きてるときの思いなんておかまいなしだねえ」
「土になってしまうの」
「違うのよ、水になるんだって」
姉との会話を思い出しながら、そりゃあいいね と
波音を聞いている
なにがいいのかわかってやしない
ただなぜか海風とともにいると
こわれていく怖さはなく
淋しいだけだと足をそっと下ろす
しんとしている身体にひびき
頭に貝殻の音がしみこむ
日がかげりはじめ
おおきな深呼吸をひとつ
夕日の落ちる町へもどろう
車に乗れば小麦の香り
夕日の匂い



小林尹夫

棲息47

夕日をあびて 鐘が鳴る
しわだらけの青い指が無数の吸盤が
いかばかりもない私をのしにくる
顔も腕も背中も腹も のしにくる

世界中の私をのしにくる
いつも時間が足りなくて
朝の空に帰って行く たこ

また太陽と入れ違いに
海からあがってくるなめらかな生き物たち
なぎさを引きずって
中心をひろげようとやってくる

もうここまで来た
隠された足跡をたどれば
きれいな坊さんが鐘をつきに行くところだ

福原恒雄

いない足に

濡れた跡が朧にもないから、足が無いと言われる。もっとももっと寄って低い呼吸で囁くより、この世の宙そらに熱く跳んで、からだ、開いて見せて、幽霊くんよ！

こえ掛けたいがまだ部屋に昼の時刻があやしい足踏み。
乾いている足でも、痛むんだ、

あの時、吹奏の喇叭につぎからつぎへと押しまかれて、歩調をとって行進、国民学校第五学年でもゲートル巻いて。その足で縦列行進したんだから。

汗も洩らさずに見えないからだが微塵になったの見たことある？ 俺の叔父さんも息をころして、

踏みとどまった瞬間にひゅると宙を裂いて砲弾。鉄がいくつも入り込んだままで、片方だけかろうじて助かった。今まだ傷痕軍人という言葉覚えている？

ハンバーガーにアンパンに以下ぞくぞく歩き喰いの街角では一途をはぐらかす話ばかりだけど、

魚屋で切られて腸わたと一緒に捨てられたなんて嘘言っちゃだめ、俺が貰って、削って磨いて耳かきにしてるんだ。だから耳が生臭いなんて、本当も言っちゃだめ、だよ。

動悸がお疲れだとしてもね、うろつく意味を掴み損ねて平坦な風だけでいいやと急造墓園の方角へ、

大笑いしたら、口から足がとび出して、そして拐かされた。助けて！ も引きずって、走る走る。走るぞ走るぞと幽霊くんも、げんきの脱け殻が明るくって。



根本 明

黒砂を月が上って

東京湾東岸の町に越して初めての夏
干潟に遊び
いつか崩れてゆく砂州に取り残されていた
潮の川があふれて岸への道を阻む
滞だ
私は恐怖に魅入られたようにそこに足を踏み入れ
たちまち激しい流れの中に沈んだ
水を飲み章魚のように手足をもがきながら
げざやか、としかいえない
頭上にまっ青に透き通った海水と白光を揺らめかせる日輪を見た
ハゼ、アサリ、海藻らの原色の世界を
声にならない叫びをあげて踊った
気がつくとは私はいくつもの目に見降ろされ
砂地に横たわっていた
だれが私を引き上げたか、礼の言葉も口にせず
小さな亡者として黒砂の路地をのぼり
もう一度この世に引き返すために高熱の黄泉路をさまよった

そのまま滞を幽界へ連れ去られた子供たちがいる
はるか昔から干潟の海に捧げられてきた幼い生けにえたちは
海崖の木々の根方で
手足掻く土偶、頸を曲げた小仏となって
海の満ち引きを臨んできた
幾万の水鳥の乱舞を
べか舟の夜灯しに撥ねるエビやヒラメを

潮を打つ神輿の喝采を
噴煙を上げる遙かな富士を仰いで

製鉄所の向こうから赤錆びて月が上ると
土偶や小仏たちの洞が開き熊手に似た錫杖が鳴り
海崖は声にならない叫びであふれる
食品コンビナートから幸町へと一筋、青い滯が走り
団地の棟々やコンビニを浸して
潮が海崖まで寄せて波うつ
土偶や小仏が横倒れ仰向いては転がって
まっ青な水を吐いている
 オンカカ、カビ
青を、祈りがくずれ
 サンマ、エイ、ソワカ※
青よ、願いをみだして
崖下の老いた舟に荒く訛って影たちが集まってくる

注 千葉市黒砂の滯では明治三十二年に五人、昭和五年に二人の女兒が犠牲になり、七体の地蔵が海を臨む所に祀られていたという（「黒砂いまむかし」黒砂の資料を保存する会編）。※は「地蔵和讃」の末。

仲山 清

カタコトの日本語で割れる卵など

人々の想いをなめして
緑となった
濃い緑 あわい緑
熱い緑 凍った緑
十重二十重に編みこまれて
稲田となり
川すじをつけて
かたむいた
ころげおちていくのは
だれの長靴
すこし湿った足さきが
残っているようななまぬるさを
関東平野の風がまきあげる
梅雨は明けたし
もうそろそろ
ひざなどつきだしても
いいころだ
あれこれ納得して
ひざを打とうじゃないか
だが あふれる想いを
おれも人なみになめし
ひざもことばもつかわない
緑になめされた土地に立つ
見渡すかぎりの濃い緑
凍った緑
正面に農夫の丸い背中を
鶏卵のようにおいて
稲田は果てしなく広がり
アメリカのどこかに似てきたか
気がつけば
カタコトのニホン語で
たまごが割れる
あたためてくれるものがあるんだな
卵黄のような夕焼けも広がり
片長靴のおれも黄いろく染まって
かたむきかげん
関東平野に立ちつくす



仲山 清

リアリティに欠けるいびつなりんご

りんごの皮をむき始めるとわたしはけさもりんごに入っていくようだ。

ガスコンロでは湯がわき始めているし、りんごに入っているひまなどないはずなのだが、皮をむく手の先から一気にからだを持っていかれる。たぶん疲れているのだ、踏ん張りがきかない、意思のありかもさだかでない、歳をとったせいかな。つまりどうとりつくろっても、果物ナイフのようにりんごのなかへーなどと、さっそうとしたものではないのだ。

視界が白いものに覆われるのは老化ではなくて果肉のせい、もの悲しく涙目になるのも果汁が涙腺を刺戟するから。心地いいが、生理現象に感情が追いつかない、もしくは結びつかない。

りんごに丸めこまれたわたしは蒼ざめているのだろう、なにかしらぜんまいの力は働いていて、なおかつその力の及ばないところに置かれているのに、めまいだけは確実におそってくる。ふらつきながら赤い薄皮に包まれていく。りんご内のもうひとつのりんごのように。

りんごに入ってしまったら、童話のなりゆきを待つような幼稚な思惟に身を任すほかない。投げつけたりんごが、虫になった男のからだにめり込んだ話をいまさらながら思い出したりする。りんごがまるで鉄の塊でもあるかのようにからだにめり込むとは！

わたしがりんごに入り込むのとはまったく正反対の事柄がどこかあって（あるはずもないところにりんごがあって）どうやらそれらと対になって、わたしはこの世に――煮えたぎる湯のそばにとどまっているとみえる。



■ Web鰐組 <http://wanigumi.com/>

オリジナル曲MP3配信

『今夜のきみは悪女』 『素浪人残夢抄』 『暗闇半兵衛』 『兇状持ちの唄』 ほか
(詞=仲山 清 作・編曲=SOULBOX) 『青い服 金の服』 詩=岡島弘子 作・編曲=SOULBOX)

■ 電子書籍 (ワニ・プロダクション制作／サイト「パプー」) 全作品・無料

写真集『銅葉ダリア』 写真25枚

詩集『象と逢う朝』

詩篇『兇器L調書』

写真とエッセイ『びわの毛皮』

『鰐組』 236号

写真集『RESINA ii』 写真20枚

フォトポエム『悪事を語り合うぼくらに快適な場所』

フォトポエム集『植物群は眠れない』 写真17枚

写真集『RESINA』 写真17枚

『鰐組』 235号

■ 今号の執筆者

伊達悦子●「折々の」同人

白井恵子●「ユタ」同人／詩集『ゆうなるかあん』

福原恒雄●日本現代詩人会、日本詩人クラブ／「掌」同人／詩集『跳ねる記憶』 『Fノート』 他

仲山 清●詩集『サイキ』 『さらば、ろくでなし』 『兇器L調書』 『飛行の構造』 他

小林尹夫●日本詩人クラブ 日本ペンクラブ／詩集『ツック タッカ キック』 『方舟の光景』 他

草野早苗●写真(中島健)＋詩『TIME TO THE TIME 2005-2007』 他

根本 明●日本現代詩人会／「hotel第2章」主宰／詩集『つ、つくような顔でガラス戸に』 他

弓田弓子●日本現代詩人会／個人誌「る」／詩集『大連』 (小熊秀雄賞) 『脳の凶鑑』 他

平田好輝●日本現代詩人会、日本ペンクラブ／「青い花」同人／詩集『海は遠いものに』 他

『鰐組』 237号

<http://p.booklog.jp/book/22687>

編集人: 仲山 清

発行所 : ワニ・プロダクション

<http://p.booklog.jp/users/wanip/profile>

作品は以下の『Web鰐組』で縦書き表示でござんいただけます。

<http://wanigumi.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22687>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22687>